第40回
読書感想文コンクール
作品集 2026



第四十回 読書感想文コンクール作品集の発刊にあたって

利尻富士町教育委員会
教育長　吉田　秀昭

子どもたちの豊かな感性と、読書にかける情熱の結晶である「第四十回 読書感想文コンクール作品集」が、このたび無事に発刊の運びとなりましたことを、心よりお慶び申し上げます。

昭和・平成・令和と、時代を超えて回数を重ねてきた本コンクールも、おかげさまで今回、四十回目という記念すべき節目を迎えることができました。これもひとえに、長年にわたり本コンクールを支え、子どもたちの読書活動を温かく育んでくださった町民の皆様、そして学校関係者の皆様の深いご理解とご尽力の賜物であり、ここに深く敬意と感謝の意を表します。

節目となる今回は、小学生二十四編、中学生二十六編、合わせて五十編もの意欲あふれる応募が寄せられました。その中から厳正な審査を経て、十五編の作品が栄えある受賞の栄誉に輝きました。

本作品集に収められた感想文の数々は、どれも子どもたち一人ひとりが本と真摯に向き合い、紡ぎ出した感動の物語に満ちています。瑞々しい言葉の選び方、表現の奥行き、そして深く確かな思考力には、目を見張るものがあり、大変深い感銘を受けました。受賞された皆さんはもちろんのこと、惜しくも受賞に至らなかった皆さんも、このコンクールを通じて自らの心と向き合い、言葉の力を磨いてくれました。その挑戦の経験は、皆さんの未来を拓く大きな財産となるに違いありません。

子どもたちのこうした成長は、周囲の温かい支えがあってこそのものです。日頃から子どもたちの読書活動を見守り、励ましてくださるご家庭や地域の皆様、そして日々子どもたちに寄り添い、丁寧なご指導をいただきました学校関係者の皆様に、心より厚く御礼申し上げます。

この作品集が、子どもたちにとって自らの努力の証となるとともに、多くの町民の皆様にとっても、本と子どもたちの豊かな世界に触れる機会となることを願っております。未来を担う子どもたちが、これからも読書を通じて心を磨き、未来を力強く歩んでいくことを願い、発刊にあたっての挨拶といたします。



【作品集　目次】

小学校一学年の部

★　佳作

「わかったさんのチョコレート」をよんで

※読書感想画応募作品紹介

アイスクリームを食べられるおふろ

利尻小学校　一年　小野（おの）　紗有希（さゆき）・・・4

★　佳作

「うどんたいラーメン」をよんで

鴛泊小学校　一年　高草木（たかくさぎ）　釉（ゆう）・・・5





小学校二学年の部

優秀作

「もうじきたべられるぼく」を読んで

鴛泊小学校　二年　長谷川（はせがわ）　柑那（かんな）・・・5

★　佳作

「王さまのふしぎチョコレート」

鴛泊小学校　二年　酒本（さかもと）　律花（りっか）・・・6

小学校三学年の部

優秀作

「りしりとうとウミネコのおくりもの」を読んで

利尻小学校　三年　尾上（おのうえ）　鯉太朗（こいたろう）・・・7

★　佳作

「クジラがしんだら」を読んで

鴛泊小学校　三年　稲川（いながわ）　湊太（そうた）・・・7

小学校四学年の部

👑 優秀作

「地震防災はじめの一歩」を読んで

鴛泊小学校　四年　片川（かたがわ）　湊介（そうすけ）・・・9

小学校五学年の部

★ 佳作

「犬にかまれたチイちゃん、動物のおいしゃさんになる」を読んで

利尻小学校　五年　瀧谷（たきや）　楓（かえで）・・・10

小学校六学年の部

👑 優秀作

「桃太郎は盗人なのか？」―探求心の大切さ―

鴛泊小学校　六年　酒本（さかもと）　千瀬（ちせ）・・・10

中学校の部

👑 優秀作

希が教えてくれた命の代わりがない理由

鬼脇中学校　二年　小中（こなか）　綾士（あやと）・・・12

★ 佳作

揺れ動く心

鬼脇中学校　一年　木村（きむら）　愛（あい）・・・13

大好きな車が教えてくれた、夢を力に変える生き方

鴛泊中学校　一年　片川（かたがわ）　琥太郎（こたろう）・・・14

青空のむこう

鴛泊中学校　二年　岩木（いわき）　莉那（りな）・・・16

☆ 奨励賞

「西の魔女が死んだ」を読んで

鬼脇中学校　一年　牧野（まきの）　泰希（たいき）・・・17

当たり前じゃない今

鬼脇中学校　三年　佐藤（さとう）　陽向（ひな）・・・18

小学校一学年の部

★佳作

「わかったさんのチョコレート」をよんで

利尻小学校　一年　小野　紗有希



わたしは、本やさんでおかあさんにこの本をすすめられて、よむことにしました。おかあさんも子どものころによんだことがあるというので、わたしにもよめるとおもいました。

しゅじんこうは、わかったさんというクリーニングやさんです。はいたつにでかけたときに、ふしぎなせかいにおりてそこでチョコレートの王さま「ザッハトルテ」をつくるおはなしです。

すきなところは、チョコレートのいずみにいくところです。わたしもチョコレートのいずみにいってたべてみたいとおもったからです。

アンティークショップのルイさんのおみせであずかった二つの人ぎょうをきれいにしてあげようとするわかったさんはやさしいなとおもいました。

ザッハトルテのつくりかたものっているので、バレンタインのときにつくってみたいです。

＊こうひょう＊

あらすじ、感想もしっかり書けていて良いと思いました。物語に出てきたザッハトルテを自分でも作ってみたいという気持ちもいいですね、ぜひバレンタインのときに作ってみてくださいね。

本を選んだ理由もいいですね。親子で同じ物語を読むことで、思い出も分かち合えると思います。

読書感想画応募作品

小野　紗有希さん作

作品名：アイスクリームを
　　食べられるおふろ



読んだ本：ぼくのおふろ
著　　者：鈴木のりたけ

ぼくのおふろという本は、男の子が色々なお風呂を考えるお話しです。わたしは、アイスクリームのおふろがあったらいいなと思ってかきました。



ご応募ありがとうございました

★佳作

「うどんたいラーメン」をよんで

鴛泊小学校　一年　高草木　釉



わたしがこのほんをえらんだりゆうはおもしろそうだったからです。

うどんとラーメンがすきだからきになりました。

わたしはうどんがあぶらあげをつかってそらをとんでいるのがすきです。

ラーメンがじめんにもようをかいてじゅもんをとなえてラーメンモンスターをよぶところがおもしろかったです。

さいごにそばのおじいさんがでてきて、ふたりともおいしいからいいじゃないかといってなかなおりさせました。

三にんでスパゲッティをおいしくたべておわりました。

わたしはなんでもおいしくたべようとおもいました。

＊こうひょう＊

いろんな麺類が登場して、とてもお腹が空きそうなお話なんだなと感じられる感想文でした。面白かったところをたくさん書いてくれているので、楽しく読めたのかなとも思えました。

本を読んで感じた、「なんでもおいしく食べよう」と思った気持ちを大事にしてほしいです。

小学校二学年の部

優秀作

「もうじきたべられるぼく」をよんで

鴛泊小学校　二年　長谷川　柑那



「もったいないけどいいや。」

と、わたしはきらいな食べものがあると、よくそう思ってのこしていました。

この本に出てくる牛は、もうすぐ自分が食べられることを知って、お母さんとの思い出を思い出しながら、

「ぼくを食べた人が、ぼくのいのちを大切にしてくれたらいいな。」と思うのです。

わたしは、その気もちを考えると、牛にもかぞくがいて、大切ないのちがあったことに気づきました。

わたしのおじいちゃんやお父さんは、お米を作ったり、さかなにたずさわるしごとをしていて、一生けんめいはたらいています。生きもののいのちや、はたらく人のおかげで、わたしたちはおいしくごはんを食べることができます。だから、いつもお父さんやお母さんが「食べものは大切にしなさい。」と言ってくれていたりゆうが、よくわかりました。

わたしは、食べものをのこさずに食べて、「いただきます」と「ごちそうさま」を心をこめて言いたいです。

そして食べものやいのちにかんしゃの気もちをわすれずにいたいと思います。

＊こうひょう＊

「もったいないけどいいや」と食べ残していたものを、この本を読んで「食べものは大切にしなさい」というご両親の言葉の意味を理解し、大切にしようという気持ちが生まれたことがよく表現されていました。

食べものに関わるお仕事をしている周りの人たちの、その働いている姿勢からも食べものの大切さを感じられていてとても良いですね。

★佳作

「王さまのふしぎチョコレート」

鴛泊小学校　二年　酒本　律花



わたしがこの本を読んだのは、図書かんに読書感想文の本をえらびに行ったらひょうしにたからものがあってとてもきれいだったからです。

このもの語は、王さまが船を作り、王さまと国みんでパーティーをします。そのたびの間にせかいに一つしかないひみつのたからものがぬすまれてしまいます。

わたしの好きなシーンは、三つあります。

一つ目は、テットがミモレットの子もりをしているところです。ミモレットがキャッキャとわらっているのがかわいくて夏休みに一才のいとことあそんだ時のことを思い出し、わたしもうれしくなりました。

二つ目は、王さまがブリッジに入った時、せん長が「バッカモーン」といったところです。王さまもおどろいていたのでわたしもおどろきました。

三つ目は、テットはウソを吐いているのに、せん長は、「テットは、バカがつくくらい正直なやつなんだ。」と言ったところです。テットはその言葉にかえせず、くるしくなりました。

この本を読んでわたしは、ウソを吐きません。ウソを吐くと自分がくるしくなるからです。

ここからはちゅう目してほしいところです。

フルムとドクターのどこかにているなと思いました。さがしてみるとはなとひげの形が同じでした。じょうぎではかってみるとなんと長さも同じでした。

こういうところも気にして白クジラ号のたびを楽しんでください。

これで読書感想文をおわります。

＊こうひょう＊

あらすじ、感想がしっかり書けており、本を選んだ理由や注目シーンも書けていて、読むのが楽しい読書感想文でした。

特に注目シーンについては、ふたりの登場人物が似ていると思い、ひげの形が同じだということに気付き、定規ではかって長さが同じであることも突き止めていましたね。面白い読み方をしていて良いと思いました。



小学校三学年の部

優秀作

「りしりとうとウミネコのおくりもの」を読んで

利尻小学校　三年　尾上（おのうえ）　鯉太朗（こいたろう）



ぼくが読んだ本は、利尻自然史研究室からいただいた、「利尻島とウミネコのおくりもの」という本です。この本をえらんだ理由は、ぼくたちがすんでいる利尻島のお話だからです。

この本の中で一番好きな場面は、ウミネコのヒナがとぶ練習をしているところです。何度も羽をパタパタと動かして、一生けんめい練習していました。あきらめないでがんばるヒナを見てすごいなと思いました。

ヒナは自分でとべるようになるまで、親鳥からごはんをもらったり、きけんから守ってもらったりしています。それを見て、ぼくもウミネコのヒナと同じように、お父さんやお母さんに守られているんだなと気づきました。毎日ごはんを食べられたり、安心して遊んだりできるのは家族のおかげだと感じて、「ありがとう」と思いました。

この本を読んで、利尻島のウミネコのことをたくさん調べた利尻自然史研究室の人たちはすごいなと思いました。ぼくもいつか、利尻自然史研究室に行って、利尻島の生き物についてもっと調べてみたいです。

そして、大人になったら、ぼくのお父さんやお母さんやウミネコの親鳥のように、自分の子供を大切に育てて守ってあげられる人になりたいです。

＊講　評＊

全体としてまとまりが良く、利尻島という住んでいる地域への興味関心も感じられてとても良かったです。

好きな場面から、「ウミネコのヒナと同じように、お父さんとお母さんに守られている」という気付きを得て、そのことに対する感謝の気持ちが書けているのもいいですし、その思いやりを自分自身も引き継ごうという意志が見受けられました。ぜひ、その気持ちを大切にしてほしいです。

★佳作

「クジラがしんだら」を読んで

鴛泊小学校　三年　稲川（いながわ）　湊太（そうた）



ぼくが読んだ本は、江口絵理さんの「クジラがしんだら」です。この本を読んだ理由は、お母さんからプレゼントでこの本をもらいました。表紙を見ると、知っているしん海生物や知らないしん海生物もいたので読む前からワクワクしました。

この本では、一生をおえたクジラがほかのしん海生物のたべものになって命をつないでいくことが、書かれていました。



その中でもぼくが、いちばん気になったのは、ホネクイハナムシです。ホネクイハナムシの、そんざいは知っていたけれど、ほねで一生をすごすのは知らなかったです。

ホネクイハナムシは、クジラのほねで一生をすごし、たまごをうんでまたそのたまごがクジラのほねにたどりつき、一生をすごすというくりかえしです。ぼくがホネクイハナムシだったら、ヒマすぎてあばれちゃうんじゃないかなぁと思いながら読みました。でも広いしん海でぐうぜんクジラのほねに、たどりついて動けないとしても自分のたまごをのこせてホネクイハナムシはとてもラッキーだと思います。

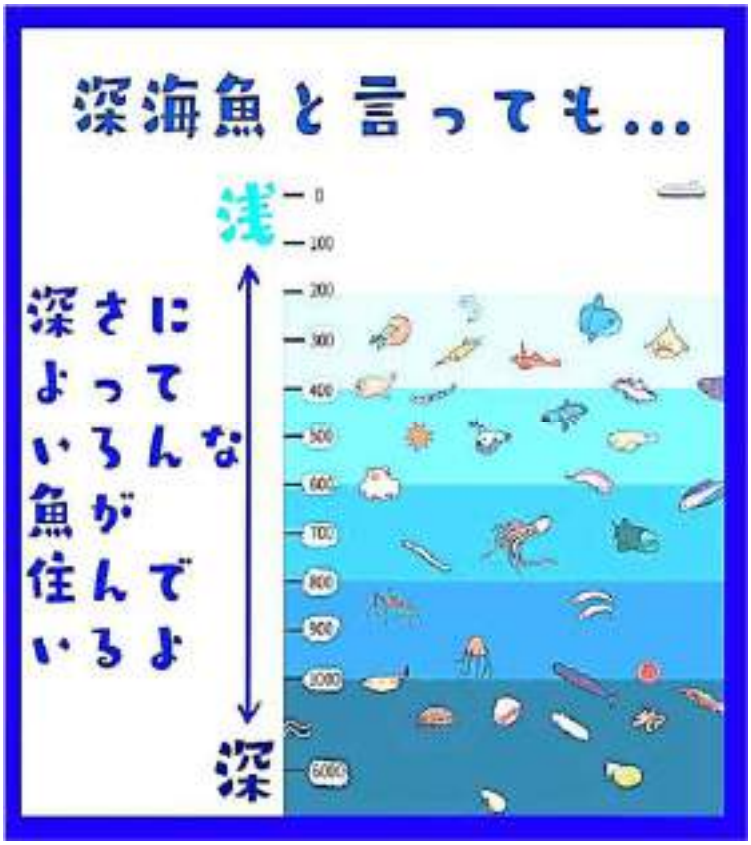
本のさいしょに「ユメザメは半年も何も食べていません。」とあります。しん海では、ほかの生き物に出会うきかいも少なくて、たべものを食べれることも少ないだろうなぁと思います。そんなときに大きなクジラの死体がおちてきたら、たべほうだいレストランがきゅうにできてすごく、テンションが上がるだろうなぁと思いました。

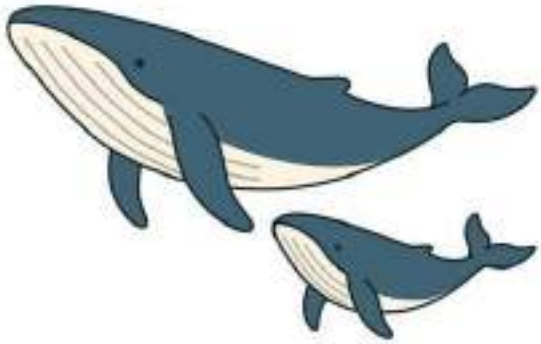
人がなかなかいけないしん海には、まだまだ知られていないことがたくさんあります。ぼくはしょうらいしん海生物をけんきゅうする人になりたいのでもっとべん強していきたいです。

＊講　評＊

深海生物が本当に好きなんだなと感じられる感想文でした。読んでいて興味深く、楽しかったです。読む前から表紙の絵を見て期待感を膨らませているのもとても良いですね。

深海において大きなクジラの死体は貴重な食べものであり、それを「たべほうだいレストラン」と表現しているのが分かりやすく、深海生物たちの気持ちを表しているようでした。







ホネクイハナムシ

小学校四学年の部

優秀作

「地震防災はじめの一歩」を読んで

鴛泊小学校　四年　片川（かたがわ）　湊介（そうすけ）



僕がこの本を選んだきっかけは、僕はまだ地震を経験した事はないけれど、最近のニュースなどで地震の速報が頻繁に流れてきて、いつ利尻島に地震が来てもおかしくないと思ったのでこの機会に借りてみることにしました。

この本には、街、家の危険な箇所や、どうすれば防げるのかなどの情報や、地震の仕組み、正体などが書かれていたり、実際にあった地震のことについても書かれています。また、なぜ日本は地震が多いのかについても書かれています。

僕がこの本の中で特に学べた事は地震が起きる仕組みのところです。なぜなら今まではプレートが関係しているくらいしか知らなかったけど、地下で海底が日本列島の岩を押すことで岩がバリバリと割れて、その衝撃が地震になるということについても知ることができたからです。また、海底が作られている場所を海嶺と言いますが、その海嶺は左右に分かれて広がっていくのでハワイが西側にある日本に近づいてきているということが知れて興味深かったです。

地震は自分はまだ経験したことがないけれど、ニュースの特番などで地震の映像を見たときに自然の力や怖さを感じました。特に耳にするのは東日本大震災です。この地震の大きな被害は津波でした。僕の住んでいるこの利尻島も海の街なので、津波には特に気を付けなければいけないことを知ることができました。この本にも津波の怖さが書かれています。五十センチメートルの津波でも人は立っている事ができません。また一メートルの津波は、木造のおうちの一階の壁を壊してしまうくらいの力を持っているそうです。二メートルの津波は、おうちを粉々に壊してしてぶち抜いていきます。そんな津波がきたら、ひとたまりもありません。なので、津波が来る前に、山や高台に逃げることが大事だと思いました。また、地震について考え直すことも大切だと思いました。今できることは防災セットを揃えたり今住んでいる地域の危険な箇所などを地図にして書いたり、家族で集合場所を決めておくことなどです。家の中では棚などの家具を固定することも大事だと思いました。

この本を読んで防災マップを作ることや何より地震への備えが大事だと学んだので、実際に地震が起きた時に活かせるようにしたいです。

＊講　評＊

時事に関心を持てていること、それを自分事として地震について学ぼうとする姿勢が伺えてとても良いと思いました。

利尻島では地震を経験することはほとんどないですが、いつか大きな地震が来る可能性はあるとのことです。その可能性に目を向けられていること、そしてそれに対してできる備えをしておこうという防災意識がしっかり芽生えています。その過程がしっかりと書かれた感想文だったと思います。



小学校五学年の部

★　佳　作

「犬にかまれたチイちゃん、動物のおいしゃさんになる」を読んで

利尻小学校　五年　瀧谷（たきや）　楓（かえで）



私はもともと本を読むのが苦手です。そのため、学校から読書感想文の宿題が出たときは「早めにやろう」と思っていても、つい後回しにしてしまいがちでした。

そんな中、札幌へ行ったときに『犬にかまれたチイちゃん、動物のおいしゃさんになる』という本に出会いました。私は動物が大好きなので、「この本なら読んでみたい」と思い、手に取ってみることにしました。

この物語には、主人公のチイちゃんと犬のマロンが登場します。最初の出会いは、チイちゃんが大好きなマロンに噛まれて大泣きしてしまう場面から始まります。けれどチイちゃんは、噛まれて痛かったから泣いたのではなく、「自分がマロンに嫌なことをしてしまったからだ」と気づき、マロンに「ごめんなさい」と素直に謝るのです。自分に悪気がなくても、相手の気持ちを考えて謝るチイちゃんは、幼い頃からの夢をかなえて動物のお医者さんになります。実在する獣医師さんの体験をもとに、相手の立場に立って考えることや、命と真剣に向き合う大切さが描かれていました。

私が一番心に残ったのは、やっぱりチイちゃんがマロンに謝った場面です。自分には悪気がなくても、相手にとっては嫌なことかもしれないと気づいて行動できるチイちゃんは、すごいなと思いました。

この本を読んで、私は「悪気がなかったとしても、相手を嫌な気持ちにさせてしまったなら、ちゃんと謝ろう」という気持ちになりました。本を読むのは苦手だったけれど、チイちゃんから大切なことを教わることができて、この本を選んで本当によかったと思いました。

＊講　評＊

物語を通して、悪気がなくても、相手を嫌な気持ちにさせてしまったらあやまるというとても大事なことに気付いたようですね。今後に生かそうという気持ちが伝わってきました。

本を選んだ理由に動物が大好きだから「この本なら読んでみたい」と手に取ったとありました。本を読むのが苦手でも、好きなものや自分で読みたいと思った気持ちを大事にこれからも時々本を手に取ってみてください。

小学校六学年の部

優秀作

「桃太郎は盗人なのか？」―探求心の大切さ―

鴛泊小学校　六年　酒本（さかもと）　千瀬（ちせ）



鬼とは殺してもよい存在なのか？鬼の正体とは何か？私はこの本を読んで、この謎について深く考えさせられました。

この本は、著者の倉持よつばさんが「桃太郎盗人説」に驚き、有名な童話「桃太郎」を通して鬼の正体、「人と鬼」の関わりについて追求した調べ学習の記録です。

私がこの本を読もうと思ったきっかけは、題名である「桃太郎は盗人なのか？」という言葉に好奇心をそそられたからです。私は、この本を読む前から「桃太郎盗人説」の存在は知っていました。ただ、詳しく調べたい、どうしてそうなのか、と考えることはありませんでした。でも、この機会にもっと詳しく知りたいと思いました。そして、著者がこの本を書いた当時小学5年生であるということにも関心を持ち、読んでみることにしたのです。

読んでみて、私は鬼の正体とは、鬼は殺してもよいのか、ということを考えました。倉持よつばさんは「鬼は一人ひとりの心の中にいて、その鬼がたまに出てくることもあるけれど、その鬼がいるおかげで人は成長する」と書いていました。私も、「心の中に鬼がいて、その鬼を一人ずつ倒していくことで人は成長できる」そう考えました。また、鬼は殺してもいい存在だと思いました。言い換えると、「鬼は人間の恐怖を薄めるために生まれた存在」だと思います。なぜなら、本の中で昔は外国から来た渡来人のこと、病気や災いを「鬼」と呼んでいたからです。渡来人は自分たちと見た目も違いますし、高い技術を持っていたとされています。病気や災害は、予知もできませんし治すこともできなかったのだと思います。その原因のわからない恐怖を、「鬼のせい」にすることで恐怖を薄めていたのだろうと考えました。

また、この本を読み終わった後、私は著者の倉持よつばさんに憧れの気もちを抱きました。倉持よつばさんは、自分の抱いた疑問の答えを出すために日本中を駆け巡りました。「桃太郎神社」や「鬼来迎」に行き、二百冊以上の本を読み比べ、たくさんの関係者にインタビューを重ねていました。

私は、去年「小学生新聞コンクール」というコンクールに応募しました。「図書館」を題材にして新聞を作り、図書館司書の方にもインタビューに協力していただきました。ただ、インタビューでもあまり深いことが聞けなかったり、情報源が本一～二冊やインターネットのみになってしまっていたので、満足できるような新聞ができませんでした。そもそも、私は図書館についてあまり疑問に思っていたことがなかったのです。題材を決め、このことについて調べればよいだろう、と何の疑問も抱いていないのに調べていたのです。だから、答えが返ってきたところで疑問も湧いてくるわけがありません。それに比べ、倉持よつばさんは自分の探究心に従い、他県の図書館や鬼に関わる施設に行って調べ、さらに考えを深めて新たな疑問を生み出す、それをくり返して自分なりの結論に辿り着いていました。そんな姿に、私は憧れ、尊敬したのです。

これからは、些細なことにも疑問を持って行きたい。自分の世界を広げていきたい。そう思わされました。それから、人に影響を与えられるような調べ学習をした倉持よつばさんが、すごいと思いました。私は物語が好きで、小説を書いています。私も一人でいいから人に影響を与えられるような物語が書けたらいいなと思いました。

＊講　評＊

あらすじ、感想、本を選んだきっかけがしっかり書けていることはもちろん、自分で疑問に思ったことに対して考察をして自分の考えを導き出せているのが素晴らしいと思いました。

また、著者に対する興味も感じられ、自分の調べ学習の経験と著者を比較しているのも今後に活かされそうな気付きであったと思います。

感想文の最後に書いていた執筆されているという小説、いつか読ませてほしいです。

＊評価基準と講評について＊

○例年通り、あらすじと読後の感想が書かれていることを基本とし、選書理由・自身の経験や境遇との比較・本から得た何かしらの気付きといった部分を深めている作品を受賞作として選んでいます。理由としては、この部分こそ、その書き手にしか書けないものであると考えるためです。自分の言葉で書く、自分の考えを表明するといった自己表現ができると、自分の価値基準のようなものを形作っていきやすいのではないかと思います。

○奨励賞としている作品については、例年は前の選定理由を踏まえつつ、少し物足りないと感じるもの、あともう少しというもの、それとは別に「視点の面白さ」という部分を評価したものを選んでいました。

今年度については、全体評価の点数がきれいに分かれたので、限りなく佳作に近い作品という位置づけとなります。

中学生の部

優秀作

希が教えてくれた命に代わりがない理由

鬼脇中学校　二年　小中（こなか）　綾士（あやと）



もしも自分にとって一番大切で、かけがえのない存在が目の前から消えてしまいそうになったとき、あなたならどうするだろうか。もしも現代の科学技術を使って、その存在と全く同じ姿、同じ遺伝子を持った生命をもう一度作り出せるとしたら。

「クローンドッグ」を読んで、僕はこれまで深く考えたことがなかった命の重みと、本当の愛しさについて、強い衝撃を受けた。主人公である航は、学校でいじめを受け、誰にも心を開けない深い孤独の中にいた。そんな彼が出会ったのが、人間に酷い虐待を受け、後ろ足の先を失った子犬の希だった。不自由な体を持ちながらも必死に生きようとする希の姿に、航は自分を重ね合わせ、愛おしさを注いでいった。希の持つ不思議な温もりは、航だけでなく、同じように傷を抱えたクラスメートたちの心まで解きほぐしていった。航にとって希は、暗闇の中に届いたたった一つの希望だったのだと思う。だからこそ、物語の途中で航がクローン技術の存在を知り、葛藤する場面はとても感動した。クローンを作れば、希が死んでしまっても同じ姿の犬に再び会うことができる。足の不自由さがない完璧な体にすることだってできるかもしれない。大好きな存在を失う恐怖や、もっと幸せにしてあげたいという願いからクローン技術に魅力を感じる航の気持ちは、僕にもよく分かった。

しかし、読み進めていくうちに、僕の中で一つの大きな問いが浮かんだ。遺伝子が同じで、見た目がそっくりな犬が生まれたとして、その犬は本当にあの希と言えるのだろうかという問いだ。技術によって形や遺伝子を寸分違わず再現できたとしても、航と希が一緒に歩んできた時間や、傷つきながらも寄り添い合った思い出までをコピーすることは絶対にできない。希が不自由な足で懸命に航に歩み寄ったこと、その姿を見て航が立ち上がる勇気をもらったこと。そうした一瞬一瞬の積み重ねこそが、希を世界にたった一匹しかいない特別な存在にしていたのだ。

科学技術の進歩は、私たちの暮らしを便利にし、かつては不可能だったことを可能にしてきた。技術でどれほど完璧に生命の形を再現できたとしても、命のやり直しや作り直しをしてしまえば、それは命そのものを取り替え可能なものとして扱うことになってしまうのではないだろうか。僕はこの本を通して、命の価値とは「完全で無傷であること」ではなく、「誰かと時

間や想いを共有しながら、二度と戻らない今を生きること」なのだと学んだ。

形あるモノなら、壊れても新しいものを買い直すことができる。けれど、命には絶対に「代わり」が存在しない。希が航に教えてくれたのは、代わりがないからこそ、目の前にある命は愛おしく、今この瞬間を全力で大切にしなければならないという、当たり前でいて最も大切な事実だった。この本から受け取ったメッセージを心に刻み、僕も自分の周りにいる家族や友達、そして日々のひとつひとつの出会いを、もっと大切に生きていきたい。

＊講　評＊

この感想文を読んだとき、気付いたら視界が滲んでいて自分でも驚きました。難しい内容をしっかりと掴み、本を通して「命の重み」や「本当の愛しさ」について考え、理解するきっかけとなったのではないかと思います。

クローン技術で見た目がそっくりな命を再現できたとしても、積み重ねてきた時間という思い出はコピーもできなければ再現もできない。そこから、命の価値を誰かと思い出を共有しながら「二度とこない今を生きること」だと意味付けたことに心打たれました。どうか、「今」を大切にこれからの日々も過ごしてほしいと思います。



★佳作

揺れ動く心

鬼脇中学校　一年　木村（きむら）　愛（あい）



私がこの本を選んだのは、たまたま出かけた本屋さんで見つけ、手に取ったのがキッカケでした。世間的には「ジャケ買い」というらしいです。表紙には、魚の絵が描かれていて、私の興味をくすぐりました。

一作目の「カメルーンの青い魚」は、主人公のサキコと、彼女にとってただ一人の男性りゅうちゃんとの愛について書かれています。シングルマザーの母親から、物心つく前に祖母に預けられたため両親を知らないサキコと、児童養護施設育ちのりゅうちゃん。呼び合うように結びついた心。けれど、サキコとりゅうちゃんは二人で生きることが難しくりゅうちゃんは街を出ていきました。この二人の在り方がとても切なく、心の迷いや揺れが体感出来るほどのリアルさでドキドキしました。

二作目の「夜空を泳ぐチョコレートグラミー」は、中学生の啓太が晴子の「ふ化」を目にするという話です。大人しくて印象の薄い晴子が自分をからかった男子を思いっきりボコボコにしました。啓太の目には「ちょうかっこよく」見えたし、それは「正しいいじめの回避としては間違いなく正解の一つだった。」という、この冒頭のシーンに、私は胸が熱くなりました。晴子が何にキレてこうなったかと言うと、自分の家族を馬鹿にされたからでした。当たり前のことですがそんなことを言ってはならないと分かっているけれど、そういうことを言うやつは今も昔も存在しています。そういうことを言ってしまう人がいなくならないのは、苛つくものだと思いました。また、この社会や世界に、依然として起こっていることも本当だから、やり場の無い不安な気持ちも私の心に広がった場面でした。まさしく、作中の「もがきながら泳いでいくしかない」の表現そのものの思いでした。

三作目の「波間に浮かぶイエロー」は、突然死してしまった亡き恋人への想いを抱えている沙世、その勤務先である「ブルーリボン」という軽食屋のオーナーのふみ、かつてふみと交わした約束を頼って店にやってきた環、三人がそれぞれ抱えるものを書き出しています。私はまだ大人ではないですが、ブルーリボンのふみさんが大切な人との約束を果たすためについた環さんへの嘘は、とても胸が苦しくなるような思いで涙が止まらなくなりました。嘘とはマイナスなイメージが強いものですが、この本の中で、嘘は人を救い、人の背中を押してくれる、とても素敵なものになっていて、それに感動しました。こんなふうに相手を思ってつく嘘が感動することに驚かされました。

四作目の「溺れるスイミー」は、主人公が製菓会社の工場で働く唯子です。唯子の父親は「離れたくなる衝動をどうしようもできない」人でした。何度も何度もふらりと消えては、なかなか帰ってきません。仕事を失い貯金が底をついても父親の衝動は止まりませんでした。愛想つかした唯子の母は唯子とともに実家に帰ります。けれど唯子は父親の血を継いでいるので、彼女もまた「ここではないどこか」を求めてしまいます。ただ、彼女は行方不明となった父の末路もその父に向けられた母の仕打ちも知っているからこそ、父のようにはなりたくないし、なれない。そんな唯子の葛藤する姿が、私自身に起こったかのようなストーリーで一気に引き込まれてしまいました。唯子の揺れる気持ちや、父や母との間にあった状況をもし自分だったらと考えると、寝られなくなるほど色々考えて気持ちが揺さぶられました。唯子の母を私の母と重ねて見えてしまうところもあり、だいぶ複雑な気持ちになりました。

最終話の「海になる」は、絶望から希望へと主人公が様々な気持ちにケリをつけ、新しい人生を歩んでいく話です。これは夫婦のDVの問題がストーリーとなっています。主人公の桜子が死産のたびに夫からDVを受ける、という物語の最初が、とても重苦しいもので辛くなります。ですが、桜子がひどい目にあった時に限って、きまねという男に出くわし彼が夫から救ってくれるというところが安心できる場面で印象的でした。リアルな現状で起こってもおかしくない環境や背景など、どの作品もドキドキしながら切なくなりながら読んだ本でした。また、それぞれに魚の名前が作品名として入っているのもこの本を気に入っているところです。物語の一つ一つの話が魚に主人公たちが例えられ、ゆらゆらと揺らいで泳ぐ魚のイメージが湧いて、主人公たちの気持ちが分かりやすく理解できました。

日々を生きていく中で楽しいことやそうじゃないことがたくさん起きそのたびに悩んだり、困ったり、戸惑ったりしますが、上手くいかないことが多い日々でも前向きになろうと思いました。

＊講　評＊

連作短編集の各作品について丁寧に感想を書けていました。「物語の一つ一つの話が、魚に主人公たちが例えられ、ゆらゆらと揺らいで泳ぐ魚のイメージ」ということでしたが、選書時に惹かれた表紙の魚の絵はまさにそれを表しているようですね。

日々生きているとうまくいかないことの方が多いです。それでも前向きになれる出会いやつながりを得ながら、前に進んで行けるといいですね。

★佳　作

大好きな車が教えてくれた、夢を力に変える生き方

鴛泊中学校　一年　片川（かたがわ）　琥太郎（こたろう）



僕は幼い頃から、車が大好きです。今回、世界に誇る日本の自動車メーカー「ホンダ」の創業者である本田宗一郎の自伝があると知り、その自伝を読んでみました。『本田宗一郎　私の履歴書　夢を力に』というこの本は、日本経済新聞の連載がベースになっており、最初は難しい言葉などが多く、大変かと思いましたが、数個の分からない漢字など気にならなくなるほど、僕は

すぐに本の中から溢れ出てくるモノ作りへの熱い情熱と、宗一郎の生き様に共感しました。

本書の中で、特に僕の感情を揺さぶった場面が三つあります。

一つ目は、宗一郎が子供の頃に初めて自動車を見て、地面のオイルのシミに鼻をくっつけて匂いを嗅いだエピソードです。自分も車が好きですが、地面に鼻をくっつけるほどの車愛があったからこそ後に世界一のエンジンを作れたのだと深く納得しました。

二つ目は、四輪メーカーとして最後発という不利な状況で、既存の大企業に挑むためにあえて誰も目を向けていなかった「軽自動車」に注目した場面です。常識にとらわれず、ピンチをチャンスに変える着眼点と挑戦の姿勢にとてもすごいと思いました。

三つ目は、もう一人の創業者である藤沢武夫が、全国の自転車店一万一千軒に手紙を送ったダイレクトメール戦略です。宗一郎の技術力だけでなく、それを世に広める藤沢の天才的な経営アイデアという、お互いの強みが合わさった二人の絆の凄さを知ることができ、宗一郎のホンダへの情熱を感じることができました。

この二人の生き方に触れて、僕はこれまでの自分自身の姿勢を深く振り返ることになりました。宗一郎は不利な状況でも諦めずに挑戦し、「失敗とは、成功するまで諦めないことだ」という姿勢を貫いています。ひるがえって今の自分を見ると、学校の勉強や部活、日常の生活の中で、「周りの方が進んでいるから」「失敗したら恥ずかしいから」と、挑戦する前に諦めてしまうことがあったと気づかされました。また、本田宗一郎の技術力と、藤沢武夫の経営戦略がお互いを百パーセント信頼して合わさった姿は、とてもかっこよく感じました。僕は普段、学校の行事などでは協力はしますが、あまり行動できていなかったりすることが時々ありました。しかしこの二人三脚を見て、仲間とそれぞれの得意なところを認め合い、協力して一つの目標に向かうことの素晴らしさを学びました。

『夢を力に　私の履歴書』は、車が好きな僕の心に、未来へ突き進むための大きなエネルギーと新たな考えをくれた一冊になりました。本田宗一郎の生き方は、どんなに高い壁があっても、自分の情熱と技術を信じて挑戦し続ける大切さを教えてくれました。僕も将来、宗一郎のように自分の「好き」を突き詰め、仲間を信頼し、自分の夢を力に変えて力強く歩んでいきたいと思いました。

＊講　評＊

全体としてまとまりが良く、本を通して得られたものがわかりやすく書かれた感想文でした。車が好きというところから、自動車メーカーの創業者の自伝を読むというのは「好き」を深められて良い選書だと思いました。

また、本田宗一郎氏と藤沢武夫氏の生き方にふれ、自分の姿勢や経験について内省している内容も良いですね。この本から得た「大きなエネルギーと新たな考え」を活かして、未来に突き進んでほしいと思います。





★佳作

青空のむこう

鴛泊中学校　二年　岩木（いわき）　莉那（りな）



私はアレックス・シアラーさんの「青空のむこう」を読みました。主人公の死んで間もない少年、ハリーがやり残したことを終えるため、奮闘する姿が描かれた物語です。この作品は私に「この世界、この時代に生まれてきたからこそ、できることがある」と気づかせてくれました。

ハリーのやり残したことは喧嘩したまま別れた姉に謝ることでした。ハリーは無事に謝ることができましたが、その道中での出会いや苦悩が大切なことに気づかせてくれます。

ハリーは他の死者と知り合っていく中で、原始人のウグに出会いました。ウグはハリーになにか訴えますが、まだ言葉がない頃の人だったため「うぐっ」としか言えず、ハリーに訴えが伝わることはありませんでした。

また、ハリーは謝るときの大きな問題に直面します。幽霊であるハリーの声は生者である姉に届かないことに加え、手紙を書こうとしても現実世界のものを動かすことはできません。ハリーは死者の友だちから学んだ超能力でなんとかペンを動かせましたが、超能力がなかったら、ずっと思いを伝えられなかったのではないかと私は思います。

私は今生きているし、言葉を発することもできるため、ハリーやウグのような経験はありません。ですが、まだ幼く何もできなかった頃の自分なら、思いが伝わらない気持ちを、何もできないなりに、理解できたのかもしれません。ですが、いつもしている会話ができなくなるのは、ハリーと同じように辛くなると思います。もし私が大昔に生まれていたら、自分の声が届かない世界にいたら、今の幸せはなかったかもしれません。この世界に生まれてきたから、この時代に生まれてきたからこその幸せを噛み締めて生きていきたいです。

また作品中には、他の部分と重ねて読むとより楽しめる場面が二つあります。

一つ目はハリーの父が墓参りをする場面です。生前のハリーが見ていた父は、いつも早足で元気よく歩いていたのに、そのときは重い足取りで力なく歩いていたようです。このことから、ハリーの父はハリーをとても大切にしていたことが伝わります。また、ハリーも父のことが大切でした。

作品の目次の前のページには「この本を父に」と書かれていました。これは本の最初によくある献辞です。「この本を父に」は言葉通り、著者から父へのメッセージでもありますが、ハリーと父に重ねると、ハリーから父への手紙だとも受け取ることができ、墓参りの場面がより一層心に響きます。

二つ目はハリーが友だちに話しかける場面です。幽霊であるハリーの声は、生者である友だちに届くことはありません。

訳者あとがきには「この本はこの世界で生きることについてのもの」と書いていました。幽霊でも話しかけることはできますが、会話をすることはできません。死に対する恐怖があって、この本を読み始めた私としては意外でしたが、日常的にしている会話も「この世界で生きている」からこそ、できるものなのだなと気づかされました。

この本は作品の中の重なりを意識して読むと、繰り返し読むたびに新しい見方が広がり、何度でも楽しむことができます。また、私にとって新しい人生の過ごし方、新しい本の楽しみ方に気づかせてくれた、大切な一冊にもなりました。この本との出会いを機に、これまでよりも密度の高い一日一日をつくっていきたいです。

＊講　評＊

今生きている世界や時代だからこそ、感じられる幸せというものがあるのだと改めて考えさせられる内容でした。「日常的にしている会話も『この世界で生きている』からこそ、できるもの」であると書かれた部分には、特にぐっときました。

場面比較をして物語をより味わえていたと思いますし、献辞にまで注目できているのもいいですね。きっと、年齢を重ねて改めて読むとまた違う感想を抱くと思います。長く親しめる一冊、ぜひ大切にしてほしいです。

★　奨励賞

「西の魔女が死んだ」を読んで

鬼脇中学校　一年　牧野（まきの）　泰希（たいき）



読書はあまり得意ではないが、兄や姉もこの本を読んで読書感想文を書いたと聞き、興味が湧いて僕も同じ本を読んでみようと思った。「魔女」といえば、グリム童話やハロウィンに出てくるような魔女を想像し、ファンタジーな物語なのだろうと読み始めた。しかし、僕が想像していたファンタジーな物語ではなく、人の温かさや大切さを教えてくれる物語であった。

中学に進んでまもなくどうしても学校に行けなくなってしまった少女まいは、季節が初夏へと移り変わるひと月あまりを西の魔女のもとで過ごした。「西の魔女」とは、まいのおばあちゃんのことである。まいは、大好きなおばあちゃんから「魔女修行」として早寝早起き、食事をしっかりとり、よく運動をし、規則正しい生活をすることの大切さを教わる。そして一番肝心なのは、「何でも自分で決める。喜びも希望も幸せも……。」ということ。毎日の暮らしや人との関わりを通して、まいは自分の気持ちと向き合い、生きていくうえで最も大切で基本的なことを教わる中で少しずつ成長する物語である。

ページをめくるたびに心揺さぶるおばあちゃんの名言がたくさん出てくる。どの言葉もそっと優しくまいの背中を押してくれる言葉たちである。

「悪魔を防ぐためにも、魔女になるためにも、いちばん大切なのは、意志の力。自分で決める力、自分で決めたことをやり遂げる力です。」

この言葉は魔女修行をすることに決めたまいが、そんな簡単なことで悪魔を防げるのかという疑問に対するおばあちゃんの言葉である。ここでいう悪魔というのは、生きていくうえで自分を悪い方向へ導くものや判断を狂わせてしまうことだろう。魔女修行として行うことは、基本的で簡単なことのように思えるだろうが僕自身、それができているとはなかなか言えない。自分の意志を尊重できず、人の意見に流されてしまうこともある。今僕は、目標を持ちバドミントンを頑張っている。悔しい思いをしたり、落ち込んだりすることもあるが、魔女修行を通して少しずつでも成長したまいのように自分の気持ちを大切にし、自分で決めた目標に向かってしっかり頑張っていきたい。

「サボテンは水の中に生える必要はないし、蓮の花は空中では咲かない。シロクマがハワイより北極で生きるほうを選んだからといって、誰がシロクマをせめますか」

僕にとって少し難しい言葉だが、説得力がある。きっと自分が自分らしくいられる形で自由に生きていくことは何も悪いことではないという意味だと思う。僕が壁にぶつかった時にはこの言葉を思い出して自分らしく一度きりの人生を楽しく過ごしていこうと思う。

この本を読んでおばあちゃんが伝える教えや愛情が僕のおばあちゃんと重なった。僕のおばあちゃんも色々なことを教えてくれ、嬉しいときには一緒に喜び辛いときには話を聞いてくれる。そんなおばあちゃんが僕も大好きだ。

「おばあちゃん、大好き」「アイ・ノウ」

心がほっこりした。僕たちもそんな関係だと思う。

いつも大切なことを教えてくれ、支えてくれる家族に「ありがとう」を伝えていきたい。この本に出会えて良かった。

＊講　評＊

物語に出てきた言葉について、難しいと感じつつも自分なりにかみ砕いて解釈しようとしているのがとても良いと思いました。

主人公の魔女修行の様子と自分自身を比較して、このようになりたいという意志が感じられました。また主人公とおばあちゃんの関係性を自分とお祖母様の関係性に照らし合わせて共通点を見出して感謝を感じていることも素敵でした。

★ 奨励賞

当たり前じゃない今

鬼脇中学校　三年　佐藤（さとう）　陽向（ひな）



大切な人と過ごせる時間が限られていると知った時、あなたはなにをしたいですか。

私がこの本を選んだ理由は、インターネットでこの本を知り、たくさんの人が感動したというのを聞いて気になったので読んでみました。

この小説を読む前はよくある恋愛小説だと思い、まさかこんなに大号泣するとは思いませんでした。

この作品は、余命宣告をされ限られた時間のなかで一生懸命に生きる少女、女子高校生桜井萌と、そのまわりの人たちの優しい思いが書かれた小説です。読み進めるうちに人の優しさと、普通じゃない暮らし、命の大切さを深く考えることができました。

心に残ったシーンは、桜井萌と付き合った佐藤日向に病院の先生が萌の病名を伝え、残りの余命について知らされる場面です。今まで病気のことも余命宣告のことも知らなかった日向は、病気のこと、余命宣告のことを知り、これまでの自分の行動を後悔しました。これからもずっと萌と一緒に居たい、という願いが深く伝わってくる、そんな場面でした。この場面を読んで、私がもし日向の立場なら、私も日向と同じく、現実を受け止められないだろうし、悲しみや不安で頭がいっぱいになると思います。いつも通り笑っていても、見えない現実があり、不安や苦しみを抱えている事があるかもしれないんだ、と気付ける人間になりたいと思います。でも同時に、後悔したくない、残りの人生もっと一緒にいて楽しいことをたくさんしてほしい、とも思うと思います。

私はこの本を読む前は、今の友達や家族と普通に過ごしていてもう会えなくなったら、と考えることはなかったけれど、読み終わってからは、今友達や家族に会って楽しく過ごしていることは当たり前ではないんだな、明日が必ず来るとは限らない、と深く考えました。

本の題名にもなっている「ストロベリームーン」は、好きな人と見ると永遠に結ばれるという言い伝えがある六月の月のことです。日向は萌がずっと見たいと言っていたそのストロベリームーンを夜に連れ出して一緒に見るというシーンがあり、幻想的ですごく心に残っています。そして別の場面では、萌が入院したことを知った日向が友達二人と学校を抜け出し、市内の病院一箇所一箇所を三人で探し回ったシーンが人の優しさ、友達の大切さを一番感じました。

今同じ時間を過ごしている相手が永遠ではないかもしれない、もし相手のことを全て知っているつもりでも本当の気持ちまではなかなか見えないということ、自分が知らない悲しみや苦しみがあるかもしれないと相手の気持ちを知ろうとする大切さ、今幸せでいることができている理由を大切にし、日々感謝を伝えられる人間になりたいです。

＊講　評＊

本を読む前と読んだあとで感想や考えの変化があったのだと感じられました。日常が当たり前でないこと、明日が来るとは限らないこと、そんな大切なことに気付けた読書体験だったのではないかと思います。

書名でもある「ストロベリームーン」について、どのような意味があるものなのか、そしてそれが描かれたシーンについても言及できているのも良かったです。



「読書は遅効性」

淡濱社　濱田実里

読書感想文コンクール、お疲れ様でした。今年もさまざまな感想文と本と出合うことができました。ありがとうございました。

こちらの取り組みに関わるようになってから四年目になるのですが、各学年になんとなく特色と言いますか、傾向みたいのが見えてきていて、それが一年経ってどんな変化をしているのかを見るのが実は楽しみだったりします。読んで書いての読書感想文は手間も時間もかかると思うので大変だと思います。しかし、引き続き作品を出してもらえると私個人としては嬉しいです。

いくつかの作品の中で、「読書は普段しない」「本を読むのが苦手」といったことを書いてくれているものがありました。とても正直だなと思うとともに、苦手意識があるのに取り組んでいてすごいと思いました。そのように書かなかった人でも、きっと読書にあまりなじみがなかったり、避けたい気持ちを持っていたりという人は少なくないと思います。

本を読むのも読まないのも自由だと思います。それを誰かに強制されるべきではないと思います。

それでも、読書はしていて損はないし、ハマっていくとしているだけで楽しいと思えるものでもあります。

私は、大人になってからそこそこ時が経っていますが、子どもの頃に読んだ絵本を読むことがあります。自分の子どもがその絵本を読みたがったり、読んでみてほしくてすすめたりするからです。改めて読んでみると、昔読んだときに感じたものとは、全く違う感想を持つことも少なくありません。あるいは、昔はよくわからなかった内容や文章が大人になってから理解できるようになっていたりします。だからと言って、大人になってからそれを読めばいいというわけではありません。子どもの時にふれていたから、過去にふれていたから、時を経て大人になってからもふれる機会が巡ってきたのです。

読書は、遅効性のものです。つまり、すぐに目に見えて何かが変わるということは少ないのです。あとから何かを見つけるためのきっかけや種まきであると思っています。いつ、その発見ができるか、何かが花開くかはわかりません。

学校で新しいことを勉強するとき、はじめての体験をするとき、それが簡単にうまくなればいいな、早くできるようになればいいなと思うのは、人間の性でしょう。しかし、残念ながらほとんどのことは手間や時間をかけないと身につかないものです。たまに、物事と自分の相性が良くてすぐに上達するもの、うまくできることもありますが、これは本当に稀です。

読書も一緒。読んだからといってすぐに何かが身につくわけでもないし、何かがすぐに変わるわけでもありません。それでも、読後に得た気持ちや考えというのは、いつか自分自身の身を助けることになるかもしれません。そのための準備だと思っておくくらいがちょうどいいのだと思います。

だから、手間も時間もかかるし、すぐに役に立たないからやらなくていい、という気持ちはもったいない。「無用の用」という言葉があるように、それがどう役に立つかはわからないのです。無駄と思える経験や時間ほど、実はのちのち自分にとって役に立つ方向に活かされることも少なくないです。

やるべきことはやりつつ、何もかも役に立てようとする必要はありません。勝手に、いつか、忘れた頃に、本を通して得た何かが芽吹く時がやってきます。

【第四十回　読書感想文応募校と応募数】

■小学校一学年の部
鴛小　一点
利小　一点

■小学校二学年の部
鴛小　四点
利小　一点

■小学校三学年の部
鴛小　二点
利小　三点

■小学校四学年の部
鴛小　二点
利小　二点

■小学校五学年の部
鴛小　一点
利小　三点

■小学校六学年の部
鴛小　一点
利小　三点

■中学校の部
鴛中　十点
鬼中　十六点

小学校計	二十四点
中学校計	二十六点
合　計	五十点

（一次審査）応募作を部門ごとに分けて、名前や学校名などを消した状態でまずは各審査委員が全作品を審査し、小学校は学年毎に三編程度、中学校は全体で十編程度に絞りました。
（二次審査）一次審査の結果を参考にして、審査アドバイザーが各賞を選出しました。アドバイザーも同じ条件で審査しています。
（審　査　会）アドバイザー審査委員が集まり、各賞を決定しました。

【審査アドバイザー】
淡　濱　社・・・・・濱田　実里　さん
【審　査　委　員】
利尻富士町教育委員会
山谷　文人　　高田　慎也　　熊谷　卓耶

【令和八年度　第四十回読書感想文コンクールを終えて】

本作品集を手に取り、読んでいただきありがとうございます。
記念すべき第四十回という「キリ番」の今年は、過去の表紙を一堂に集めたデザインにしてみました。記念号っぽさは出ているでしょうか？……と言いつつ、実は「読書感想画」表紙部門への応募がなく、その代案だったことはここだけのヒミツです。
今年の審査は各委員の評価が揃い、受賞作の決定自体はスムーズでした。一番悩んだのは小学一年生です。上の学年に負けない素晴らしい出来栄えで、二作品とも優秀作にするかで協議が白熱しました。「提出された二作品が両方とも最高賞でいいのか？」「まだ一年生だし、この先のチャンスもある！」ということで、来年への期待を込めて今回は佳作としました。今から次が楽しみです。
また、今年も濱田さんに「本選びのヒントになったら便り」を作ってもらい、公民館でコーナー展示をしました。学校の授業で来館し、そこから選んだ本で感想文を綴ってくれた子もいて、一冊の本を通じた地域の温かい想いにただただ感動しました。
最後に、感想文を書いてくれたみんな、協力してくれたすべての方々、そして応援してくれたご家族の皆さん、本当にありがとうございました。

利尻富士町教育委員会　鬼脇公民館業務係　係長　熊谷　卓耶

読書感想文コンクール作品集　第四十号

令和八年十一月　発行

発行者

利尻富士町立鬼脇公民館

印刷所

株式会社　国境





利尻富士町立鬼脇公民館